Ｂ—２　題材構成の工夫

ア　家庭生活・学校生活の中から課題を見つけ、生活に活用できる製作物への取り組み。

　　　〜ネームカード作り〜　　　（二次１・２時）

　玉結び・玉どめの学習後、練習布で名前のぬい取りをした。その後、黒板にいつもはっているネームカードを自分で作り、使っていこうということになった。このことを通して、意欲的に製作に取り組み、基礎的な技能の定着と生活への活用の意識化を図ることができた。

世界にたった１つのネームカードができました。

写真

「これまでの学習を生かして、ネームカードを作ろう。」ということになりました。黄色いフェルトに青いししゅう糸で自分の名前をぬい取ります。大きなテープでカバーをし、裏に磁石を付けて出来上がりです。

　今、教室の黒板には、世界でたった１つのネームカードが２２個ならび、授業で大活躍をしています。「こんなネームカード使っているの、ぼく達だけかもね。」とみんなほこらしげです。

「今度は、漢字でぬい取りして、当番カードを作りたいな。」

「かわいいマスコットもつくりたいな。」と思いはどんどん広がっています。「昨日、家でお父さんにお守りつくったよ。‘健康’ってぬい取ろうとしたら、ちょっと失敗したけど。」というすてきな話もありました。また、休み時間に、色々なマスコットを作っている人も見かけますね。カエル・メダカ・野球ボール・あじさい・りんご・プーさんなど、次々と出来上がってきています。どれもアイディアいっぱいで、とてもかわいいですね。物をつくる楽しさ・喜びが広がっていますね。

（「学級だより」一部抜粋）

イ　一人一人の考えが表現できるような視点を持たせたり、互いの思いや願いを表現した作品のよさを見合ったりする場の設定。

　　　〜フェルトのマスコット作り〜　　（二次３時と課外）

　多彩な色のフェルトをたくさん用意し、いつでも自由に使えるフェルトコーナーを設けた。一人一人が思い思いにフェルトのマスコット作りをし、掲示板のマスコットコーナーに掲示していった。

　そして、お互いのよさを見合い、よかったところをカードに書き貼っていった。カードには、「玉どめをうまく使って、かわいいあじさいができたのがいいね。」「なみぬいで、野球のボールのもようがうまくできたね。さすがピッチャーだね。」「お守りに、ガンバレってぬい取りしてあるのがいいね。」などがあり、作品を見合い、お互いの思いや願いを認め合うことで、意欲的に製作に取り組み、技能の確実な定着に結びつけていった。

ウ　習得した技能を活用して工夫できる製作活動。

　　　〜マイふきん（さしこ）〜　　（二次４・５時）

　なみぬいの練習の際、製作する楽しさを味わいながら、確かな技能を定着させていきたいと考え、「なみぬいができたら、こんな物が作れるようになるんだよ。」と作品例を紹介した。子ども達は、「さしこで、自分だけのふきんをつくり、家で使う。」という目標ができ、なみぬいの練習に意欲的に取り組んだ。

　そして、練習を終えた子から、さしこのふきん作りに取り組んでいった。

・ハンカチほどの大きさの正方形のさらしを１人に１枚ずつ与える。
・一人一人が自分のさらしに、思い思いにチャコペンで直線の模様を描く。なみぬいに自信がある子どもは、かなり複雑な模様を描き、まだ時間がかかる子どもは、シンプルな模様を描いていた。
・５色のさしこ糸を用意し、好きな色を選ばせる。
・完成したふきんから教室前の廊下にコーナーを作って、掲示していく。

　この取り組みの中で、きれいに仕上げたいという意欲をもち、丁寧に根気よく取り組む姿が見られた。昼休みや放課後、机を寄せ合って楽しそうに製作したり、自分から家に持ち帰って仕上げた

りする姿も見られた。子ども達は、１枚のふきんの製作を通して、なみぬいの技能を定着させるとともに、習得した技能を活用し製作する楽しさを味わうことができた。

エ　個に応じた練習量が確保できること。

　　　　～ボタンつけをしよう～　　　（二次６時）

　練習布で３種類３個のボタンつけの練習をした。

　早くできた子どもには、色々な大きさ、形のボタンをたくさん用意した箱を提示し、
「この中から自分の好きなボタンをつけてみよう。」と投げかけた。
すると、子ども達は、
「大きなボタンがあるぞ。やってみよう。」
「小さくてかわいいボタンだな。これもつけられるかな。」
「大きくても、小さくてもつけかたは、同じだね。いっぱい挑戦するぞ。」
と、意欲的に何度も練習を繰り返した。そして、ボタンつけの技能を確実にすることができた。
「最初は時間がかかったけど、早くつけられるようになった。」
「何回もしたから、もう完ぺきだよ。自信まんまんだよ。」
という声が広がっていった。

　練習用のボタンがうまくつけられない子どもには、大きな２つ穴のボタンを与え、個別指導を行った。

　そして、再度、練習用のボタンつけをした。前回よりもスムーズにできたことで少し自信をもち、次々と箱からボタンを取り出し、繰り返し練習を始めた。回数を重ねていくうちにきれいに、しっかりつけられたことを自分自身で感じ取ることができていった。